

昭和55年11月1日発行 読者定額認可
平成15年11月1日発行 雑誌第1回1日発行
俳句雑誌 第55巻第11号

俳句雑誌「おき」

沖

11
月号



沖
發行所

紅葉どき

林 翔

万葉園に恋の歌満ち秋うらら

相合傘とりどり街の秋時雨

新箸剥く記憶のヴェール剥ぐやうに

空はあをし風は何いろ烏瓜

推敲帖・豆短冊

「推敲」という言葉のいわれは、ご存じの方も多かろうが次の通り。唐の詩人賈島が詩句を考えながら歩いていて他人にぶつかってしまったが、相手は大詩人韓愈（韓退之）の一行の一人。韓愈に声を掛けられて「実は『僧推月下門』と『僧敲月下門』と、どちらがよいか迷っていたのです。」と答えると、「僧は敲く月下の門の方がいいよ。」と助言された故事による。

ところで私は、昭和13年から昭和36年まで、「推敲帖」と名付ける句帖を使っていた。縦書き大学ノートの一頁に三句か五句ぐらいしか書かず、余白をたっぷり取って置き、推敲した句をその余白に書き込むのである。推敲帖は23年間に丁度23冊、幸い戦火を免れて残っている。

右のような方法も悪くはないと思うが、あまり推したり敲いたりしすぎたものには成功作が少ない。「賜

空を背に白雲を背になべて柿

蟪蛄の静止の影やかくも細き

なだれ咲く残菊に頬撫でられし

階のなかば息切れ紅葉酔

燃えながら吾も散りたし紅葉どき

うそ寒く句稿の裏に訃報添ふ

わる俳句」という言葉があるが、やはり俳句は「賜わる」ものなのだろうか。私の出世作となった句、

今日も干す昨日の色の唐辛子

を推敲帖第七冊で見ると、全然推敲の跡が無く、これも賜わった句なのであった。

推敲帖をやめた昭和36年以降も、推敲をやめたわけではない。手製の豆短冊（縦13種、横1種5耗）を用い、推敲の都度、それを替えてゆくのである。私の書斎の机の上、テーブルカバートビニールシートの間には、いつも二、三十枚の豆短冊が並んでいる。推敲帖も悪くはないが、この方法で通そうと思っている。

林 翔



夜長

能村 研三

俳句と読書会

夜長かな一人の時間使ひきり

朝寒や残響の良き西洋館

雁渡る狂はぬ時計つまらなし

秋燈と鏡責めなる楽屋かな

毎年十一月五日は、市川市民文化賞の贈賞式である。平成十年から市民が市民に贈るユニークな賞として始まったものだが、光栄なこととしてその第一回の文化賞を能村登四郎がそして平成十三年の第五回目には林翔先生がそれぞれ受賞した。その後本賞にさだまさし、井上ひさしと著名な方が続いた。そして本年の第八回目の市民文化賞の奨励賞は洲上千津さんが受賞された。洲上さんはもちろん俳人としての功績が対象になったが、この他に長年読書会活動をされていて、市や県の読書会連絡協議会の会長を何期も務め地域の文化発展に貢献されたという理由による。洲上さんは、「沖」の創刊以前から私の家においていただいている方で、個人的にも今回その功績が認められたことはうれしい限りだ。というのほどんど父と旅行しなかつた母を、読書会の一員に加えていただ

稲びかりその一瞬を山河研ぐ

里に降りる熊を捉へし稲びかり

台風を逃げおほせたる旅最中

幾何学の粋を極めて雪吊りす

川面より町が低くて無月かな

神輿屋に素風威厳の店構へ

き、旅行に連れ出してもらったことがある。寝たきりの祖母の看病が終わり、母が旅に行くことが出来た時期は今から思うとほんの限られた短い期間であったが、その間にいろんな所へ連れて行ってくれた測上さんの温かさは本当に有難かった。そして母が亡くなってからは、父が俳句の用で出かける時は、必ずといってよいほど北川英子さんと一緒に旅へ付き添ってもらった。登四郎は余り大きな荷物を持たなかったが小さなカバンを持つ役目は測上さんであった。測上さんは「沖」の幹部同人であることはもとより、個人的にも能村家の近くにおいて細かいことにも気を使ってくくださる方であり、今回の受賞は登四郎も母も喜んでいるに違いない。測上さん本当におめでとうございます。

能村研三



蒼茫集



大河

北川英子

帰るべき家に灯点る秋の暮
槍鶏頭鬼門かたの方に控へをり
ゆつたりと大河真中に豊の秋
纜なわに雀蛤なまことなる思案
漕ぎ方も呼びびて月見の座が揃ふ
月光を杯に満たして湖上なり

帰燕

富岡夜詩彦

秋風やいくたび病まば業果てむ
癒ゆる日を誰よりも待つ妻に秋
わが一生妻にも一生なりしよ秋
握手をかたく妻秋風を戻りゆく
帰燕ゆく病床のわれ置き去りに
新涼や医師のことばに生きねばと

含羞

鈴木節子

拳二つやがてひらきぬ虫時雨
含羞の水草紅葉でありにけり
舌頭にころがす嘘と一位の実
恥かしくはづかしく桃熟れにけり
仮の世の己が健啖草の花
梨を食ぶ思想たがへて夫婦なる

遊女塚

金子孝子

秋風や遊女とのみに葬らるる
素風にも音立つるもの遊女塚
蟬が占む投げ込み寺の樹といふ樹
じりじりと灼けて「八紘一字」の碑
黒門の弾痕いまに蟬しぐれ
女にも丹田ありて南瓜割る

潮鳴集



語部 渡部節郎

滴りを山の語部かと思ふ
砂丘にも続くうねりや土用波
駒草やガレ場を跨ぐロープウェイ
己が影崩して手繰る窯の竿
「ちゃん」づけの弔辞でありし蓼の花

大氷河 深野敦子

氷山の大動脈や滝しぶく
さりさりと晩夏の氷河貸靴に
大氷河夏のなごりのうす濁り
フィヨルドへ巨船秋燈かかげをり
白息を散らしクレパス覗きけり

蠍座 宇野九

文字摺の身を振るほど空が好き
時刻表どさりと捨てて夏終る

高炉明りに残業の月白し
思ひ募りて蠟座の赤い星
水禍の町誤植のごとく夕焼くる
青松虫 長谷川千枝子

紫蘇をつむ昔鼻緒のよく切れて
夜のとばり青松虫は降るやうに
月さやか我に迷路のごとき脳
鳴き止めば只の木法師蟬いづこ
朝顔や終の一花と思ひしに

残暑の味 中島あきら

黒飴はまこと残暑の味したり
背に刺さりしは向日葵の視線かと
曼珠沙華手足冷たくなりけり
銀河より零れしかとも水美味し
百の窓に百の飲食秋ともし

沖作品



能村研三選

漆黒に琳派のごとし花火の尾

東京

中尾 公彦

鶏頭に蜂の軌道の狂ひけり

床板に肌の吸はるる大暑かな

満月や鯨のおよぐ星に棲み

葛を引く星を引き寄す勢ひもて

膝の辺に日傘の温し映画館

秋彼岸沖ゆく船に速度見ゆ

にはとりの千羽鎮もる月夜かな

豊年や雲の遊びも遠くまで

朝顔の終の一花は葉を持たず

墓洗ふ亡姑送りきし背の風

藍いろの空となりけり魂送り

口ごもることには触れず夕木槿

夕茜雲染め余す厄日前

声立てば消えさう秋の虹仰ぐ

千葉

林 昭太郎

長崎

辻 尚子

夕風や掌に落蟬の魂ひかる

茶立虫暮色をまとひつつ鳴けり

鯿はねる水面の月を乱しては

星の字は日が生ると書く宵の秋

あをふくべ生前葬といふがあり

逆光の影せはしくも揚羽蝶

絵筆置く山河色なき風のなか

潮入の坂東太郎星月夜

秋の蟬森に日の斑の降るやうに

添水鳴り嫁ぐ子の黙父の黙

橋脚に逆巻く濁り夏出水

露天湯の岩を枕の星月夜

肩越しの顔で撮らるる宿浴衣

磐梯のしるき稜線星月夜

予報ほど降らず日照雨や花木槿

東京

工藤 進

千葉

廣島 泰三

小松 誠一

雲の峰沸騰点の白さかな

市川市

内山 照久

夕焼に染まり巨船の接岸す

大汗や身ぬちの心棒までも濡れ

神奈川

菅原 健一

商館に遺る年号夏つばめ

澄むほどに恐ろしきもの秋の水

長野

矢崎すみ子

花野ゆかくれんばうの鬼となり

恋文の書き出し迷ふ雨月かな

東京

菊地 光子

鳥かごが鳥をさがして秋の暮

向日葵のかたちに風のリフレイン

石積みのだム青墨に霧霽るる

丸木椅子並べて霧の卓布かな

鶏頭の紅の極まり日のにほひ

ひまはりに覗かれてをり通知表

坂

ようこ

高木 嘉久

坂 ようこ

潮の香や帰燕吸はるる空の青

福嶋千代子

海のなかまで窯変の夕焼雲

稲の束くるりと山の暮れにけり

働く手みなひるがへし盆踊

野分雲地球の自転はやまりぬ

長崎

沖島 孝光

美しき嘘かと思ふ大夕焼

大観の波のしぶきや空は秋

恐るるはあまりに近き赤い月

秋燈や海図にあまた朱筆痕

新人賞予選句（十一月）

満月や鯨のおよぐ星に棲み

中尾 公彦

膝の辺に日傘の温し映画館

林 昭太郎

藍いろの空となりけり魂送り

辻 尚子

鱈はねる水面の月を乱しては

工藤 進

潮入の坂東太郎星月夜

廣島 泰三

露天湯の岩を枕の星月夜

小松 誠一

雲の峰沸騰点の白さかな

内山 照久

澄むほどに恐ろしきもの秋の水

菅原 健一

向日葵のかたちに風のリフレイン

矢崎すみ子

ひまはりに覗かれてをり通知表

菊地 光子

沖作品 選後句評

*
能村研三

満月や鯨のおよぐ星に棲み 中尾 公彦

月への宇宙飛行が適う時代になっても、まだ満月のお月さまには、うさぎが棲んでいると思えば楽しい。それだったらあのお月さまから地球を見たらどんな星に見えるのだろうか。「地球は青かった」と言うのは宇宙飛行士の言葉だが、その青い部分は、地球上の青い海なのか、それとも陸地の森林の緑なのか。月はうさぎ、地球は鯨とする、それぞれの星の大きさと生き物の大きさも不思議と符号する。そんなことより何より地球の生き物の代表に鯨を選んだ詩性はすばらしい。「沖」にも執筆いただいた上肥あき子さんの句集名にもなった「水溫む鯨が海を選んだ日」という句がかつて話題になったが、鯨は哺乳動物であることから、海に棲んでも陸に棲んでもおかしくはない。そんな動物だからこそこの句もおもしろくなった。

膝の辺に日傘の温し映画館 林 昭太郎

一句の省略された中からいろいろなことが想像されて楽しくなる句である。最近では昔の古くて汚いという映画館のイメージとは違った「シネコン」というのが主流になりつつあるが、この句はやはり従来の映画館のイメージが似合う。出来れば時代背景も昭和三十年代の映画の全盛時代の方がよい。炎天をしばらく歩いて、やっとたどり着いた映画館、入場券を買って中に入ったものの、暗くて中々目が馴染まず、やっと席についたものの、映画館内は冷房が効いていて、膝に置いた日傘の温もりが印象的であった。いずれにせよ日傘そのものを炎天の中でなく暗い映画館の中で存在感を示させたのはおもしろい。

藍いろの空となりけり魂送り 辻 尚子

盆になると夜、精霊を迎えるために火を焚く。この火を頼りに精霊がやってくると思える昔からの習慣も、やはり灯火なしでは精霊も夜道は辛いだろうという思いから焚かれているのだという。魂迎えの行事は仏事であっても、どこかに喜びがあるが、魂送りの行事は寂しさを含んでいる。送り火の火も消され薄闇につつまれるときは、空は暮れ藍いろの空となっていた。この空の色合いも実際の空の色の描写でもあるが、それに加えて、自分自身の寂しさを表出する心の色でもあった。(以下略)